



夷遊鳴記

第三編

卷三

春



庫書館	108
入	80
169	
40	數冊

13
3093
13



朝夷之節義

却嫌脂粉汗顔色
淡拂娥眉朝至尊

昭元
七日三
未

朝夷巡馬記全傳第三編卷之三

東都 曲亭主人編輯

色界の嬪婦鳥
欲海の和尚魚

中韓第廿五

吉田屋

義邦の性温順なり一朝の怒を棄て黑萩を打と日來の如
挙動は似れども志は正しく非理非義はあはれ忍びがた怒り
況この君伶俐なるも歳尚二十の足らざる千慮の一失さるべし
詰旦義邦の疾起る黒萩が氣色をうつすその款待日來は憂
絶て怒るものなり謀るも一点も心も放さず是より
毎日進止を試るよあつた得がたなり
後悔して行状を改めざるは
原素この老女も
標吉の亦幸ひかん

月影三編卷三

車馬の終末

尻も結ぶ細糸の糸もぬれぬ女子と又釋易なる女子ゆくとやう
 やうな思ひとてその懸念せざりけり黒萩の義邦を可愛と思ひ死
 ずりも憎しとての百倍の思ひもなほ延き老女をばその通宵深念の天明
 後の聊も怨る氣色を顔に立願のうらありとてその日より禁酒とせしむ
 身の行ひと慎むとて進止の所為とてその表裏を指月寺の住持
 塞玄が國府より還ると俟りけりその程その月廿八日八田丸郡内が一周
 忌に當りしあれはより標吉の三日己前より山獵せし廿七日の連夜も
 づゝ餅と搗ぐ家廟は供里人中の配遣しなほは六盡ゆく秋の日の園
 うらかくして錢と表と米を負ひ指月寺に赴りて留守居の老僧よけの翌の
 讀經を誂へ施物を布て墓に詣り香華をも向うかゝるとその日も竟る暮
 けりぬる時中も黒萩の口をへ入らざるともあれ細布かぐらう裳裙長地衣の
 前後と撫るの禪もせし禱もせし毎は果敢とて絲の標吉が精悍に
 かぐらて共の日を消せりさてその明朝黒萩の指月寺へ詣るとてまづ湯を
 沸して項の脂を洗ひかぐら化粧結髪する程よとて午ふりしとて心をど
 やうに飯をたぐへる衣を更やうやく宿を煉出り且くと標吉母が脱捨し
 舊衣を疊んとし引揚るは一聯の珠数そのほとて在りしこれいふとて
 どのや背門は出くせり義邦のほとていひたて母が睨て歩隨に珠数を
 遺れていひたて追かともいひたて遠くいあらど出居はぬらつつけさぬと
 いへば義邦點頭とてそのいひをえつつけこれ現若女の歩かれは二三町あり
 おと過とてとていひをえつつけいへば標吉慌忙たて半履をも穿あへむ
 裳を褰て走去けりかぐら程は黒萩のいふと三四町中とて指月寺の
 塞玄があるへとて来るよ達ひたりあひつけぬ其片向く懸て樹蔭よ

前後と撫るの禪もせし禱もせし毎は果敢とて絲の標吉が精悍に
 かぐらて共の日を消せりさてその明朝黒萩の指月寺へ詣るとてまづ湯を
 沸して項の脂を洗ひかぐら化粧結髪する程よとて午ふりしとて心をど
 やうに飯をたぐへる衣を更やうやく宿を煉出り且くと標吉母が脱捨し
 舊衣を疊んとし引揚るは一聯の珠数そのほとて在りしこれいふとて
 どのや背門は出くせり義邦のほとていひたて母が睨て歩隨に珠数を
 遺れていひたて追かともいひたて遠くいあらど出居はぬらつつけさぬと
 いへば義邦點頭とてそのいひをえつつけこれ現若女の歩かれは二三町あり
 おと過とてとていひをえつつけいへば標吉慌忙たて半履をも穿あへむ
 裳を褰て走去けりかぐら程は黒萩のいふと三四町中とて指月寺の
 塞玄があるへとて来るよ達ひたりあひつけぬ其片向く懸て樹蔭よ

月見編

立會ひ昨日標吉が御寺へ参りて死をい歸院のりぞまづりし何の程
 歸るあひしよろづは富く賑く國府の水が深るやんこも若ぬ死
 めひよけを逗留の久しかりし彼処の後家達を蕩しつるを面白たる
 のをかりけんあかぬとと笑まかか背を礮と敲著れば塞女の半
 脱る齒を見しころち笑ひ國府の富でも賑くも彼色界の不施不捨
 あり縁あり女人の度しごとく立ちへりてん男が顔をもよくほしう
 めひりごと。これも是も黄金佛の利益かれば錫を振る勸化は月を
 累つて昨夕の暮く帰著せり長途の疲労ありあはれほどあづりや
 兒身もあはれんとて一周忌の日向がごとく其方を投く折る死処
 ゆく逢ぬといへば黒藪四下をえり是首の府彼首の縣を待撓死
 勸化は日を送らんや黄金佛の建立中捷徑のりもはれといひ

くひくか何声と潜め彼骨相書とて素らりて及逆人吉見義邦
 標吉は舊縁ありとて四月の比よりゆを込まれ縉紳のわゆる果と
 いのぬむりふ人を使わく檀那態面ハ憎なれども標吉ハ佛ありく
 庇を貸く母屋を取らる寄食人よを措く絶て頭を擡得ぞ贖
 吾侪は恋慕してをり袖を引くもゆさし源氏の君の後弟でも業平
 朝臣の弟でもん身を捨く仇く死弱冠を何やうまき度かたつとバ
 うゆさるよあ隣は罵り懲りて辱しめられその後のも足も得出さしど
 寝首撥るるともやあひ過せ背がらされて夜とてやまへハ睡られど
 日が村の長もあく領主の館へハを遠く訴ゆんも女子の甲斐あはこ
 標吉ハ甥あれども虚と大事ハ相譚まをへハ危く形をくんんが還り
 めの日を待まびてゆりしとわひあふりあり一夜のまが僻身を彼君よ



寒女

寒女

黒菰



黒菰
途子
寒女
あひ

黒菰

あり附らる目尻の涙を悉く拭ひたり。塞まて眼を睜りこいとも
 慮外の珍支之彼義邦ハ謀反の骨張経仕が与黨あるは平泉の柵の中
 入らで其許の宿所は躲れ居より。心残まばあ人同類とも許稟
 此バ則その身の罪科を免して賞祿をあるべしとわれ。一日舎蔵て
 彼奴を搦く献ふ答あてた該はなれど年且うくとも撃術早技本支の
 いまぞ揃らも毛を吹た疵を求めか。後悔其処は立が。由断して
 潜びよう首取てん身は遍与さん。然とて時日延ま。今宵かた
 翌の夜よといひけ耳を引よ。て密語ばう。領死亡人の一周忌
 七日の殺生ハ好むべき。あねども。晡時が過れば精進を落ても
 憚りた。墓泰をやく。あより。還るが疑れん。彼冠者が臥
 房の案内今宵の暗号高外よ。ひ。死の影あれども。路辺あて

これも便か。ん身も。寺へ共侶は誘ふ。とて香深の法衣の袖を
 引け。引も。小松原。ぬねの日と戯れ。う。譚ひ。伴ひ。たり。
 是より先は標言ハ黒萩を。追懸く。走ると三四町。迫る。を。バ。日。が。養母ハ
 道次は。立在。て。法師。は。物。を。あ。う。め。て。懸。て。樹。下。に。立。會。ひ。額。を。合。して
 密語形勢。あ。う。ほ。う。く。あ。ひ。く。間。道。を。遠。り。く。後。方。は。進。つ。き。身。長。や。も
 餘る。尾。花。が。袖。に。隠。れ。て。一。五。十。を。中。つ。吉。見。冠。者。を。殺。さん。と。相。譚。は。法師。ハ
 塞ま。去。歳。より。養。母。と。情。由。あ。る。人。の。聚。語。の。耳。は。入。ま。さ。ど。も。か。り。べ。し。と。ハ
 ろひ。た。や。これ。只。天。魔。の。所。行。あ。る。べ。し。譬。は。冠。者。の。性。と。て。五。十。は。近。た。人。の
 母。は。ゆ。あ。ら。ん。と。う。け。ぬ。ん。や。是。ハ。決。し。く。母。の。冠。者。は。調。戲。あ。ら。せ。し。と。
 懲。を。せ。ぬ。べ。ふ。く。然。る。て。惡。心。を。發。せ。し。人。は。これ。あ。ら。び。て。彼。君。を。害。し
 る。う。あ。ら。ん。月。が。心。を。盡。せ。し。甲。斐。か。是。併。古。主。梓。殿。及。父。母。の。亡。魂。が。

養母やまは珠たま教しやくを遺もれさるく吾われ脩しゆを導しんじぢひひかん。さていつあせんとどうも。
 或あるハあ呆あれ或はあうと頭あたまを傾かためて又また其その類るいはい嘘うそ嘆なげめをうけをかくく標ひょう吉きちハ。
 困こまどとから途みちにくらうさらぬからる思おも惟ただもよ思おも意いありもも養やまは母はとも頭あたまを。
 忍しのびどろろいいどろくく被お君きみを落おれんめも深しん念ねんして其その処ところより。宿しゆく所しよハ。
 還かへりバ義ぎ邦ほうを。遅おそく。途みちゆく追お着つきらうわと同おなじく標ひょう吉きち点てん頭とうの。
 又また立た度たを。諸しよ折せ戸とを内うちより。楚そと鎖さしつ裳ももの塵ち埃あららち。拂はらひ義邦ほうの。
 春はるりと愀あ然ぜんと。稟らひやう母はハ。追お着つきらうを。途みちゆく大おほ丈たけを。
 竊ひそ聞きゆひに。君きみの。処ところを。隠ひそまして。人ひとハ。あられ。被お此こゝの。惡あ棍こんホ。
 今いま宵よ更さら闌らん潛せんび。入いる。擊うちまり。と謀める。之その速すみよ。毒どく氣きを避よけ。危あやし。
 あり。日ひの没ひる。ま。で。い。れ。稱なひ。ひ。に。某たが甲が夜やより。外とは。出でる。兒こ郎らう導どう士し
 らんの。駒こま形かたを山やま踰をり。と玉たま造ぞうの。と。落おち。せ。ぬ。と。其そのハ。尼に沼ぬま川がわの。あ。か。

也。君きみを待まちたり。牙あ齒ぢの。松まつの。邊へを。送おくり。つ。け。ま。り。ん。是こゝより。賀が美み郡ぐんは。至いたり。山やま
 又また山やまの。里さと柿かきノ。案あん内ないと。あ。ら。ぶ。ら。め。ハ。究きうゆ。く。迷まい。難なん地ぢを。あ。ら。ぶ。地ぢ理りを。
 説とくとも。蓋あきを。曩な昔せきハ。母はは。領りやうめ。ひ。沙さ金きんを。も。ゆ。ひ。が納な戸との。鍵かぎハ。親おやあり。
 腰こしは。著ちて。あ。ら。ぶ。目め今いまハ。不ふ便べんと。それ。も。甲が夜やの。程ほどは。を返かへし。進まり。を。へ。た。と。
 真ま立たく。密ひそ語ごハ。義ぎ邦ほうを。あ。ら。ぶ。驚おどろ。か。ら。る。原はら来きたを。あ。ら。ぶ。け。ら。よ。か。く。ま。ど。
 命いのち運うん縮ちゆうを。逃のがれ。と。脱だつれ。と。か。ら。ぶ。と。田でん夫ふ野の人にんの。よ。は。か。ら。ん。た。
 無む念ねんの。ろ。う。と。あ。ら。ぶ。運うんを天てんは。任まかし。て。其その許もとの。教しやくハ。隨ずいふ。べ。ー。又また黑くろ救きうを。領りやうけ。
 沙さ金きんハ。月げつ来きた寄き宿しゆくの。料りやうを。あ。ら。ぶ。ひ。と。実まことハ。渠みちを。あ。ら。ぶ。と。盤ばん纏ちんハ。腰こしハ。餘あまり。あ。ら。ぶ。
 あ。ら。ぶ。の。ろ。う。と。懸かけ念ねんを。せ。も。今いまハ。あ。ら。ぶ。あ。ら。ぶ。汝なんぢが。忠ちゆう義ぎ落らく涙なみだ禁かぎめ。難なんを。感かん謝しゃを。
 堪たげ。よ。う。と。バ。只ただ一ひと身み一ひと命いのちハ。汝なんぢハ。任まかし。を。ま。さ。す。と。い。つ。き。て。標ひょう吉きち額がくを。つ。れ。
 世よハ。せ。あ。ら。ぶ。と。ハ。あ。ら。ぶ。と。陪はい臣しんの。子この。某たがを。ど。が。お。ん。目め前まへへ。あ。ら。ぶ。と。ん。や。落おち

させぬか死○あまくもどく後○あまひなるべられどもいふおせん養母○あまを捨て走らん○あま
 不義○あまに加旗某も歩く宿所○あまは還らざる撃○あまの連○あまる速○あまかゞんざれ寄宿○あま
 料○あまをどく宣○あまはるはあろお老○あまくハ各○あまあつものあまハ養母○あまもあくあろ
 ぬさして後○あま返○あま一○あま事○あまんあうりともこのうを今○あま親○あまあ告○あまぐこ一○あまおのびくよ
 起行○あまのゆあろあまハ肝要○あまあんと密○あまやうは相譚○あまゆ程○あまは秋○あまの日○あまあまは
 短○あまくて未○あまのあまもあ過○あまる今○あまハ母○あまのろり来○あまぬん氣色○あまを曉○あまられぬ
 ありひひつ立て諸折戸○あまを閉○あまく外面○あまうらながあひあうくと柴小屋○あまは掛
 草鞋○あま引○あまあろ一○あま此○あま彼○あまと擇○あまつて石○あまは推當○あま打○あまやうけて締○あまを融○あまく
 程○あまは義邦○あまも笠○あまの紐○あまの断○あま離○あまるを結びとあく竹縁○あまの下○あまは隠○あま置
 身の西○あまく後○あまとああも又○あま標吉○あまがとれハ得○あまく一○あま母○あま央○あま秘○あまをいひつゆハ
 黑款謀○あまる所○あまありて怨○あまる氣色○あまを頭○あまさる飽○あまもてくれ油断○あまをを潜○あまは

里人○あまをうち相譚○あまひ害○あませんとはりあべし。さゆを明○あまと地○あまは善○あま候○あまて。これ
 救○あまんとあふ標吉○あまハ孝○あま小○あまして且○あま忠○あまありまれ足利○あまはあり一日○あまハ不憶○あま井平○あまが
 資○あまはよりて危窮○あまを脱○あまれ今○あま又○あまあまは標吉○あまが忠義○あまは仇○あまを避○あまるといへども
 彼○あまホと始終○あまを共○あままあぐ一○あま皆薄命○あまの致○あまを所○あまうち歎○あまくとも甲斐○あまあつと
 ちひへして出○あまべたうととんくあんとく立○あまあへハ標吉○あまハ打和○あまげら草鞋○あま小
 續○あま松○あまよ燧○あま火○あま燧○あまをとり添○あまく義邦○あまのほろりよと来てつ君○あまハ暮果○あまて後○あまは
 厠○あまへ登○あまやうめて背門○あまのろり出○あまぬハ某○あまハ先○あまとちて尼沼川○あまのあまはる侯○あまん
 出○あま後○あまれぬふかと謀○あまあはせく草鞋○あまと續松○あまを遞○あま与○あまよあハ義邦○あまハ遺○あまるこつた
 その誠心○あまを歡○あまびずえてこれをも笠○あまとゆり共○あまは竹椽○あまの下○あまは置標吉○あま地○あま坑○あまは
 柴○あまとさ一○あま燃○あまく夕膳○あまの准備○あまをもち程○あまはまハ黄昏○あまはかりはけり浩処○あまハ黒款○あま
 遽○あましく帰○あまり来○あまつ折戸○あまを推○あまく進○あま入り窺○あまの下○あまは裳○あまを寒○あまく足の塵埃○あまを

洗ひ流せ。後ひ来つ。悪僧塞玄懐中。一口の戒刀を隠し。襟巻を
 めく。面を包と樹牆の間より。地玩のほろり。坐し。義邦をんが程子。
 黒萩竊し。指し示し。更よ。を抗頭を掉。その意を示せ。塞玄はいく
 づびと。かろうち。點頭。今来し。へ。退如。當下。黒萩。水田を求。食鷲の
 如く。隻脚。替。引揚。て。跡を拭。程子。標吉。ハ門の戸を引。おん。と。立出つ。
 母。ハ。還り。あひ。う。と。呼。け。られ。て。黒萩。ハ。を。と。答。て。進。入。り。頃。日。の。日。の
 短。老。女。の。歩。の。甲。斐。あ。く。て。急。ぐ。と。ほ。ま。で。黄。昏。さ。り。さ。り。彼。君。ハ。い。う。ま。ど。也。
 と。小。間。は。義。邦。ハ。掛。燈。益。火。を。点。し。途。の。疲。勞。を。向。慰。や。る。氣。色。よ。の。ま。は。
 黒。萩。ハ。あ。ら。う。竊。し。歡。び。て。他。吏。あ。兒。さ。も。は。撲。扱。を。か。て。夕。膳。も。果。し。ぶ。
 標。吉。ハ。養。母。の。あ。ら。う。一。周。忌。の。料。供。よ。と。し。里。の。甲。乙。は。物。を。受。が。う。い。ま。ご。
 い。の。く。謝。礼。を。述。む。翌。と。受。ど。生。活。は。障。あり。甲。夜。の。程。より。そ。こ。ら。う。ち
 遠。ら。が。吏。中。の。左。側。の。還。る。し。疲。勞。あ。ら。う。く。鎖。し。て。を。く。睡。り。更。と。い。の。
 黒。萩。は。く。あ。ら。う。義。邦。を。結。果。る。は。標。吉。が。宿。所。は。あり。て。ハ。熟。睡。ま。る。と。も
 影。護。し。是。の。と。が。心。く。を。な。り。し。ま。ら。う。び。く。か。の。と。し。あ。唯。天。の。祐。よ。し。を。
 歡。し。め。と。心。の。勇。む。を。笑。顔。に。あ。ら。う。く。そ。ハ。一。段。の。り。あ。り。か。三。日。佛。夏。は
 拘。ひ。て。生。活。を。關。する。は。翌。ハ。殊。さ。う。半。日。の。間。も。と。惜。り。ぬ。べ。秋。の。夜
 長。此。此。の。心。の。ど。う。は。相。譚。く。よ。や。天。明。く。還。る。と。も。お。ん。身。の。保。養。は
 あり。あ。ら。う。吾。倚。ハ。何。と。も。お。ん。ね。と。く。と。い。の。も。が。せ。ば。標。吉。ハ。擔。裏。の。松。と。り
 あり。せ。ど。火。ハ。点。さ。だ。熟。る。里。の。中。あ。ら。う。是。を。く。も。と。お。ん。け。ぬ。九。月
 廿。八。日。の。暗。々。れ。バ。更。闌。く。還。る。為。中。と。肩。を。掛。さ。ら。吾。倚。ハ。知。ら。ず。來。ん。
 と。く。就。寢。ぬ。後。と。い。ひ。母。を。ん。う。り。て。義。邦。は。目。を。注。ぎ。冠。着。ぬ。ぬ。
 面。色。は。お。ん。立。て。を。遣。し。げ。標。吉。ハ。一。町。あ。ら。う。歩。く。竊。し。引。く。樹。牆。の

洗ひ流せ。後ひ来つ。悪僧塞玄懐中。一口の戒刀を隠し。襟巻を
 めく。面を包と樹牆の間より。地玩のほろり。坐し。義邦をんが程子。
 黒萩竊し。指し示し。更よ。を抗頭を掉。その意を示せ。塞玄はいく
 づびと。かろうち。點頭。今来し。へ。退如。當下。黒萩。水田を求。食鷲の
 如く。隻脚。替。引揚。て。跡を拭。程子。標吉。ハ門の戸を引。おん。と。立出つ。
 母。ハ。還り。あひ。う。と。呼。け。られ。て。黒萩。ハ。を。と。答。て。進。入。り。頃。日。の。日。の
 短。老。女。の。歩。の。甲。斐。あ。く。て。急。ぐ。と。ほ。ま。で。黄。昏。さ。り。さ。り。彼。君。ハ。い。う。ま。ど。也。
 と。小。間。は。義。邦。ハ。掛。燈。益。火。を。点。し。途。の。疲。勞。を。向。慰。や。る。氣。色。よ。の。ま。は。
 黒。萩。ハ。あ。ら。う。竊。し。歡。び。て。他。吏。あ。兒。さ。も。は。撲。扱。を。か。て。夕。膳。も。果。し。ぶ。
 標。吉。ハ。養。母。の。あ。ら。う。一。周。忌。の。料。供。よ。と。し。里。の。甲。乙。は。物。を。受。が。う。い。ま。ご。
 い。の。く。謝。礼。を。述。む。翌。と。受。ど。生。活。は。障。あり。甲。夜。の。程。より。そ。こ。ら。う。ち
 遠。ら。が。吏。中。の。左。側。の。還。る。し。疲。勞。あ。ら。う。く。鎖。し。て。を。く。睡。り。更。と。い。の。
 黒。萩。は。く。あ。ら。う。義。邦。を。結。果。る。は。標。吉。が。宿。所。は。あり。て。ハ。熟。睡。ま。る。と。も
 影。護。し。是。の。と。が。心。く。を。な。り。し。ま。ら。う。び。く。か。の。と。し。あ。唯。天。の。祐。よ。し。を。
 歡。し。め。と。心。の。勇。む。を。笑。顔。に。あ。ら。う。く。そ。ハ。一。段。の。り。あ。り。か。三。日。佛。夏。は
 拘。ひ。て。生。活。を。關。する。は。翌。ハ。殊。さ。う。半。日。の。間。も。と。惜。り。ぬ。べ。秋。の。夜
 長。此。此。の。心。の。ど。う。は。相。譚。く。よ。や。天。明。く。還。る。と。も。お。ん。身。の。保。養。は
 あり。あ。ら。う。吾。倚。ハ。何。と。も。お。ん。ね。と。く。と。い。の。も。が。せ。ば。標。吉。ハ。擔。裏。の。松。と。り
 あり。せ。ど。火。ハ。点。さ。だ。熟。る。里。の。中。あ。ら。う。是。を。く。も。と。お。ん。け。ぬ。九。月
 廿。八。日。の。暗。々。れ。バ。更。闌。く。還。る。為。中。と。肩。を。掛。さ。ら。吾。倚。ハ。知。ら。ず。來。ん。
 と。く。就。寢。ぬ。後。と。い。ひ。母。を。ん。う。り。て。義。邦。は。目。を。注。ぎ。冠。着。ぬ。ぬ。
 面。色。は。お。ん。立。て。を。遣。し。げ。標。吉。ハ。一。町。あ。ら。う。歩。く。竊。し。引。く。樹。牆。の

蔭軒端かげのきおどくみ檢れどもとととちちあ立潛たてひそびて家内うちうちを張はかりのかり然しかども
 かほ早はやかりととへさへ有あ繫け去さるるくく背門せいもんは立た又また前門ぜんもんは立た在外そとかかるる義邦ぎぱうを
 守護しゆごはると一時ひととき許ゆる遠寺えんじの鐘かね声こゑ幽ゆ々々既すでに初更しよごを告つ渉せままバ
 今いまへ冠者かんしやの出いであめめは程ほどはああとととああふふんん猶なほ彼此たつちを窺うかがめめは怪あやしととと
 りもりかかななれればば僅わずかに心こゝろををままくくししのの尼沼にぬまののくくへへ赴おもむけけりり是こゝより先まに
 黒萩くろはぎハ標吉ひょうきちを出いで遣やりくく心こゝろかかななれれどもども日ひが相譚あひあひハ法師ほうしゆゆく
 武藝ぶげいゆゆいと疎うとかり又またその齡よひも五十いそぢはああままままばば擊うち漏ゆるままとととああととと
 所詮あま冠者かんしやは酒さけを浮うひひて醉よめ臥ふききて寢首ねびを搔かせんせんこれこれはは計略けいりやくの
 亦またああるるべべししと較計けうけいハ佛ぶつ更まははありりくく里人さとびとが贈たまへへ酒さけを煖あくく看みもも些
 塩梅しんばいハこれこれを義邦ぎぱうは勸すすめめくくいいののやや曩なははかののがが僻ひがりりて殿とのの氣色けしきを
 蒙かうむりりああたた勸解こんげままとととああひひああががるる標吉ひょうきちが宿所しゆくじよををれればば影護えいごててああららも
 些いぞぞ面皮めんぱいののと厚あつたた花女はなむすめと思おもははれれんん恥はじじくくをを信まねねれれ賤せんの男おとこハ所為しよゐ
 ととと鬪い争あせせ果はるる中直ちゆうぢゆうりりととと益えきををほほつつととのの信まねねかかそれそれははああららととと
 過まりり夜よののううららららはは滞とどままるるととと益えきをを奉たげげててああららととと媼おんハ今宵こんしやう限かぎりりハ
 又また更さらに禁酒きんしゆとと身みの慎しんを肝要かんじやうハ心こゝろををままくく仕つかへへんん尚なほととととととととととととと
 油あぶらせせもも素すありり寛仁かんじんハ大度たいとの君きみハ許ゆるささせせめめととと泣なききハ只ただ管くだ賂ろ話わてて止とままり
 けりけり義邦ぎぱうこれこれををううららららとととこのこの光あき狐きつね又またとととをを懸かるるとととああららとととんん標吉ひょうきちののひ
 つつととと此こゝ彼かああひひああははれれババととと毒殺どくころせんせん為なららとととととととととととととととととと
 せんせん為なららべべししそれそれも又また此こゝ奴やつを謀まりりて脱だ去さんんと心こゝろああららとととああららととと莞わん尔にと笑わらふ
 ここハ改あらりりししとととををままけけ月つき来きああらら身みを寓あららととと解とけけらら人ひとを拳こぶしととと若輩わかにの
 短慮たんりよありり後悔こうかい臍せを噬くととと久ひさししとととこれこれををかかくくハ勸解こんげももせせめめ何なんとと心こゝろをを含くみみて
 ととと益えきととと奉たげげてて飲のむむののととと席薦せきせんハ濕ぬれれ入いららせせとととととととととととととととととと

あまのりしりし。含笑つて盃をうち戴け。義邦はいど如酌をとりんとて。
 溢るもては。篩あふ黒萩。この十日あり。酒を絶く喫さる。今
 その香を聞。その味を味へ。舌も蕩る。むらみおぼえて。餓鬼の如く。飲
 盡し。又義邦は。勧めけ。義邦は。酒を嗜。れども。既に毒を
 試。くれれば。只この老女。酔せん。軽く受。て。授。へ。黒萩。我を忘れて。
 盃の数。あり。眼中濁。り。舌も。義邦も。い。酔。る。如く。
 膝を崩。し。そ。が。ほ。り。村杖。突。た。黒萩。よ。ん。身。何。と。あ。あ。人。畏。れ。
 る。恨。て。その。実情。を。あ。れ。バ。心。中。も。わ。ぬ。ご。と。と。おん。身。よ。腹。を
 立。せ。り。これ。あ。の。妻。も。あ。ら。ん。身。も。亦。孀。婦。之。齡。ハ。相。應。ハ。ハ。
 とも。世。は。絶。く。あ。ら。ん。悔。し。た。と。を。あ。け。け。り。この。め。れ。く。黒萩。胸
 り。ち。騒。ぎ。その。宣。め。を。原。言。を。ん。と。い。を。あ。く。え。ん。へ。か。で。おん。身。を。欺。く

べ。おん。身。が。吾。侍。を。欺。く。の。ま。か。で。解。く。ハ。堪。く。一。罷。く。む。と。う。睡
 らん。と。い。ひ。け。て。身。を。起。ま。せ。黒萩。睜。く。推。禁。め。い。ん。と。ま。れ。バ。又。さ。う。お。
 塞。ま。よ。約束。あり。初。め。り。この。君。の。如。う。宣。ぶ。い。う。を。ま。れ。何。を。恨。ま。よ。人。を
 相。譚。ひ。害。せん。と。あ。く。謀。る。べ。た。う。と。を。あ。い。告。ら。ま。ら。告。げ。の。今。曾。彼
 人。が。潜。び。入。く。郎。を。殺。せん。あ。ひ。切。く。密。更。を。白。し。共。侶。よ。走。らん。決。り。や。く
 密。更。を。告。め。う。く。バ。愛。も。想。も。彈。果。く。吾。侍。を。伴。ひ。あ。あ。う。う。こ。て。ま。こ
 り。ま。あ。て。け。り。と。悔。の。八。十。び。百。十。遍。尋。思。は。暇。あ。ら。な。れ。ハ。掌。合。と。拜。む
 の。も。曾。か。し。あ。い。を。あ。く。酔。も。巡。り。て。泣。沈。む。義。邦。是。を。べ。ん。へ。ん。と。避。て
 臥。房。に。赴。た。り。且。し。く。黒萩。ハ。頭。を。擡。る。ん。わ。う。え。く。悲。や。郎。の。捨。れ。る。
 一。緒。の。陳。腐。と。独。酌。は。復。五。六。碗。乱。飲。盃。を。投。捨。く。隻。膝。立。て。沈。吟。
 再。三。び。考。て。も。偶。靡。く。男。郎。花。彼。遍。昭。又。折。せ。り。今。と。う。の。花。ゆ。か。

過失と賠詰密議を告ぐ今宵郎と共は走久然と膝ふるを掛く。
 立あぐれとも跟く踏く蹠たぐる義邦の枕方は近づく程はと周々もが
 撥被る弟の義邦立ち傍は在り引つけく遣過し背を礮と衝しつ。
 黒萩の撞と音して蒲團の上は倒れたり。酔らるりの癖はバツバ
 倒れく遠よ始起に睡るが如く死するが如く鼻息のほど高かりける。
 義邦はその醉を久く有せん為は黒萩が頭より衣ふくうらち被るく。
 臥簞の下は隠しる脚半の紐を結びあむむ刀を取て腰は帯潜ゆるふ
 とと推開く竹縁の尻をむけ草鞋を穿燧袋を腰は著笠をふかす。
 松明を携く黒白も別ぬ暗は夜は標吉が誨る路は其処うとわはつるも。
 尼沼を投く出ぬへ夜は亥の時ふなりまなりさる程は塞玄の寝よの
 鐘を途ゆく笑つ時分ありと標吉が軒端近く潜ゆる内の中を張宗。

寂寞として人定り南面の竹縁ある雨戸を細く開くありこの小房は
 義邦の臥簞へと縁て笑り去歳をせりく来つる家の案内はよく
 知るあより入ると黒萩が戸鎖を外しうらうら首尾好くとあつる
 點頭且縁頬よみを掛く伸上り又耳を側之内の熱睡せを知けん
 身を横めて閃た入り水を戒刀を引技側めく撥被く霎時寢息を
 窺ひつ是をけりといひ決めく左よは被る衣を拊背のあうへ跳菟く
 藁藉も徹すととと刺を刺すく忽叫苦とむくりは魂滅る声を立て
 せはあみ随は刺苗く懸く首を擡りける當下塞玄あやう嚮は
 黒萩が標吉をバ甲夜の間は謀りて宿所は在せどいひはなれども
 立かへりて厨のほとりよ臥る致這奴が覺るハむづうかんとおらんハ更よ
 黒萩あやうを及むく血刀を拭ひ納め首級の頭髻引提て烏夜は

紛々々々走去々々。〇程は標吉ハ尼沼川のあかき立々吉見冠者を
 俟程は半時ありを過せども義邦のあかき来びゆく先々ぬ暗夜
 〇山路は迷ひぬり後れて悪僧の毒はあひぬり也斯と
 〇何時までも門は立々候べり。〇養母が曉るとりぬとあひ
 〇過のせられぬ冠者を苦しむるなり。〇心もとぬとむりごちつて
 〇遠く燧とよりゆく携来つ松明を火を移しかの家路は引くへを
 〇途をゆく油断せぬ冠者へ後先飲とて前後左右の眼を配りて来々
 〇あかき家が百歩足らぬ小段道九折の樹下を遠りゆく行合は塞素
 〇礮と逢ぬ標吉ハや照を松の光は信とて金面を包み癖者が引提し首ハ
 〇養母ハ吐嗟とむり驚怒とぬれ癖者親の讐其処を退とて呼留れハ塞素
 〇亦火の光は取る首とてとぬるて錯誤とて懸駭ハ引提し首と

〇らち捨去逃人とぬれば標吉ハ奮然として松明技掛ハと見と打振々
 〇背を一刀丁と砍る砍られ落る頬被脱とてあかき塞素も戒刀引
 〇技ハ一声啼々切つを受が打靡し怯む処を蹴倒して起んとぬる
 〇一撃は首打落々息を吐ぬ又松明をや照り々仇人とぬれば塞素
 〇ありこの悪僧ハ吉見殿を害せんと謀り々ぬれハ正しく竊せらるる
 〇あかき母を殺し々去り去らんとあかき裏面のやうをもつぬとぬ
 〇懸く宿所はかへり先義邦の臥房をさるる養母の死骸ハるる
 〇ありとて松明を接滅し々納戸の行燈引提く家の四隅隈を檢ふ
 〇外ハ絶々死骸もあかき燧は盃盤狼藉とて原來冠者ハ恙なく
 〇落ぬハ疑ひかし自業自得といひあかき母ハ何の故も臥房を
 〇かえ々冠者は代り塞素は撃れぬハあかき母ハ吉見殿を



色中餓
鬼人間夜

惡僧塞玄



明處
有王法
暗裡
有鬼神

權士

塞玄

醉臥せんとく酒を勧めみづろ。解く彼君の臥房は迷ひ入るを塞玄ハ
 あつて冠者ありとあひたり。母を害せし秋母の不幸ハ酒の咎
 恩は悖り義は背き吉見殿を害せんと謀り邪慳ハ因果觀面天の
 責責あふんぬ。かく故主を救めても親を人殺すれど吾侪ハ何とあ
 りぞ。さそふをさし。哀しやと養母の首をうら抱抱潜然としてうら
 歎く涙は間ハあうりけを且しと心を鎮り吉見殿ハ恙なく落をあや
 否とあふんぬ。是もあをたすかども既親を人の害され。れ又仇を
 撃つればあん迹を慕ひぐ。當処ハ村長を誰をあはがし許ささ
 當郡の領主莊司殿ハ理非明断めと慈悲ありと風声は豫て雲り
 夜ハいと長蛇比あり。今より領主の館は泰らバ曉ぐ。必到らん。
 仇討のより免許をぬく罪せらる。とあへ。後ハ冠者の往方を索ん

吁。あうりあり。とひとりごとく。舊の岐路へ走り行後の證據と塞玄ハ戒を
 拿鞭を拾う。首と共携来つ。母の頭顱より添く。一紙は楚と負ひ
 又松明ハ火を移して。門戸を外より鎖固め。星の光をうち仰げ。夜ハ尚
 亥中田舎道山田の畔ハ秋蛙鳴声高館の邊。領主の館へと出たぬ。

中輯 第六
 山神洞孔 夜雨
 信夫館の隠蓑

程ハ義邦ハ黑白も別ぬ。鳥夜ハあふんぬ。述認る人も影護さよ
 松と燭さ。山路をうく。あふんぬ。其処ハ是処。秋と踏分る。行どもあけども
 標吉ハ教一川の上ハ雲を峰ハ登り山を下り。あふんぬ。彼此とら
 遠るやうハあふんぬ。後ハ時を移し。身ハあふんぬ。疲勞ハ火を鑽く
 松より。あふんぬ。照く。進む程ハ夜ハ丑三の比。あふんぬ。深ゆく秋の天定わ

かく雨さへ俄頃も降るぞ心も共よ松明の光もあま滅んとをかくるの
 つよく進まぐとと 驟て樹蔭を索ふよこの処巖へ高く松瘦て枯れんと
 けり茅萱の下よと絶くある虫の声を在斯くくこの山間は廣やうある洞
 ありく左右の岩よいとゆりたる注連懸りたり義邦こそをえりて願ふ
 この洞の中ゆの山の神の禿倉あらんあややく雨を避んとく進み入らんと
 けり松明の火の滅果たりそのとれ裏面より声をうけく来つるも
 誰とと問ふりのあり義邦これ驚とくく原來この石室の山賊の巢
 ありたり運の窮と覚期してかりくようちも騒がざ刀の鞘よをを掛く
 両三歩進み入りこれの是行客こそうの夫何のものと問うへされく又裏面より
 されも亦行客こそむぞ山路は迷入りてこの処わて日暮り既よ今宵を
 周夜も六麓よ下りぐとれを掃りて天の明るを俟といふ義邦些かち

おくれも猶欺詐とてとゆとて一点の油断せぬいつくありんか
 猛獸蛇蝎の患あらんよわどく火を燎がやと詰問へば寔は然りいふ者ん
 今朝山河を渉せしとれ燧袋を遺せし術利と各たり義邦すてをん
 火の燃ゆる燧も松もあり雨は撲れく滅るのといひくといひく燧とて
 早く火を打よいと湿やうわれば早火つらばとくく焼くところ松明は
 終つて是を左よより照らし右よより刀の鞘を握りて洞の中へ進み
 入りたるその人のほろりお立ち送よ面を對されが彼人もゆ声きけ和君の
 冠者よとていささやと問ふとく義邦晴を定めんよとてこの行客へ 江二二
 廣光ありとていささやと問ふとく義邦晴を定めんよとてこの行客へ 江二二
 三三廣光の邊へ居替りて主君を上坐し居おゆをひひりけ
 見参入りかへば孰を先へせりや胃のを踊るるかりくは辨るること

加代が如し併廣光が月来の念願空しくつた悲れ尊願を拜し
 歡びの言葉も迷も竭しつた。君の被夜より井平をぬくは世を
 りるはひく後宿中と憑くはかう身ひらるる山中に迷せぬ心
 當國への昨けい立らせぬ。又外へん隠宅を求めせぬ。廣光が
 身も摘く推量りも多艱苦もさそといひうけくさしむ涙も目を閉
 義邦も鼻うちらと現命わり時わく圖さるる再會の歡ひはれも亦夢
 かとをかりあか。この春三月三日の夜故郷を逃去りしと死をの曉くこも上毛
 あり勝澤の松原ゆく間なく追兵は追首の色もれは後陣を禦んと井平と
 立別を間違はなりく。渠が存亡をあらは後れく来つるもめと
 及べ直よ如賀も赴た朝夷はあんとく佐味が宿所よひゆれ。向は内ハ
 去歳の春より鎌倉に在りといふこの故も義秀が往方も絶くあつりかく。

進退其処は究りて且く小松も逗留せられ汝も亦来るをんせり。朝夷ハ
 陸奥へ赴たらわいあつらとあつらとよはがめく川尻湊に赴たつて
 商船も便して四月のちあつたこの陸奥も尾崎の浦に船を寄せれ海陸の
 疲勞大くわく。且く旅宿も杖を笛く更も高館を歴覽し頻進して
 玉造の判官殿の墓をめぐり。かたさ駒形山寺や梓治部丞有友が花黨
 馬兼標太が子も標吉郎といふものも邂逅し。渠が家も身を寓せしふ
 まむる世を潜びし。又一朝は禍起りて其処も足を駐ること始りて
 標吉が救らる。尼沼のくへんく。眺く脱れ去るれもいと暗なま山路は
 迷ひくさしてゆく川辺に到らぬ。あつたあへよるの雨が主従も媒介して
 処もあつらんよこの洞あつて汝も逢へん寔も奇ここの氏神の冥助あり。又
 先考の導たあつた勝澤の危難も雨もあつて。媼子を喪ひ今宵ハ

又雨よあつく。ちひろけをく三二は逢ひぬ禍福ハ猶糾る纏の如しと
 古人ハいへり吉凶倚伏ハ測るべからず。浅良井小三二ハ恙多死也汝ハどが
 當國ハ潜居と知く来つる牧井平中逢さる。秋葉ダ生死ハあつ
 ざるや。と過來し。こを告むを侶を忘るぬ誠心ハ廣光也。感佩
 或ハ歡び或ハ憂ひて。おぼ太息を吻。天飛鳥の鶉の啄大く。なるぞ
 粗語ハ風雲環會ハ難う。其痛まを負せ。速ハ小松ハ到らハ
 彼処ゆく。あひま。んは悔し。死ハ只病著。その故ハ箇様く。と八嶋室平
 ホと防死。留と。死必死を朝夷ハ救れ。是より先ハ義秀ハ蒙二耶ハ
 相譚。く浅良井小三二を越中婦員ハ岩神。有。相向判五許遣せり。
 又義秀ハ去歲ハ秋。相向ハ宿かり。思人。一。二。ハ再會。ハ已。と。ぬ。ぬ
 判五。ガ女兒友鶴を娶り。し。り。又義秀ハ今茲ハ春下總へ赴死。く更ハ

下野。ハ来。ま。る。父赤貝の里。と。過。り。く。浅良井。ハ。對面。ハ。冠者ハ危窮。を。考。り。
 又廣光ハ義秀と相伴。ハ。その日大石の山越。く。上野。ハ。出。信濃路。あ。ぐ。
 来。つ。と。死。廣光ハ金瘡腫痛。く。中途。ハ。日。を。を。し。り。小松の旅宿。ハ。ゆ。り。
 と。死。追捕ハ沙汰嚴重。ハ。義秀ハ扶掖。れて。か。く。旅宿。を。出。これ。ども。
 進退。窮。り。く。志。あ。と。自殺。せん。と。し。つ。と。死。義秀ハ禁。や。れ。又。彼。一。三。葉。二。郎
 ホ。ガ。冠者。と。朝夷。を。迎。と。ん。て。行。轡。を。早。来。つ。る。環會。衆。人。ハ。諫。られ。く。
 心。あ。ら。ん。若神。ハ。伴。と。義秀ハ冠者。と。井平。を。索。ん。と。く。馳。て。其。処。より
 立。別。を。信濃。近江。を。あ。ら。ん。と。赴。く。り。を。その夜。さ。り。一。三。二。ハ。守。人。ら。を。を。
 巨細。ハ。物。が。く。く。と。又。い。の。ゆ。某。ハ。父子夫婦。ハ。ひ。わ。け。か。く。相向。ハ。扶。助。ハ
 あり。と。露。命。を。繫。死。贖。判。五。ハ。ま。が。為。ハ。良。藥。を。求。り。死。の。金。瘡
 七月。ハ。至。り。く。大。く。か。ん。平。愈。せ。り。冠者。ハ。兒。在。所。を。索。せ。り。んと

ろひ決りて。あつ方位を占せ。は全くこの陸奥に當り。よりて箱向は。
 辞し別れ商旅。打扮。直進。當國の封疆。入りの八月の。
 越後路あり来。なれば。河沼。耶麻會津大沼の四の郡を編歴し。
 安達。原。安積。沼。信。夫。郡。伊。達。川。田。柴。田。名。取。の。片。瀬。川。宮。城。野。の。
 萩。未。枯。の。岩。の。躑。躑。も。春。の。似。也。奥。へ。と。色。深。紅。葉。を。幣。は。是。
 首の神彼首の社へ願言ハ。君はあはせ玉造賀美栗原の山里。日教
 あり。露。を。露。を。露。け。途。も。長。月。の。乃。ひ。吉。日。君。恙。
 見。泰。の。本。意。を。遂。し。五。十。四。郡。の。主。は。福。ひ。あり。有。
 歡。び。の。天。地。は。満。る。意。氣。揚。る。忠。信。あ。り。頭。れ。義。邦。熟。り。
 原。来。朝。夷。約。を。違。へ。む。の。春。吾。情。を。訪。ひ。る。只。こ。が。危。窮。の。と。
 多く對面をぬぐり。遺憾に限り。既。廣。光。一。家。を。救。れ。

勇の蔭に寓し。あひ。恩。惠。之。彼。人。ハ。加。賀。子。鄰。越。中。婦。負。
 あり。と。後。皆。小。松。へ。と。走。り。今。更。は。身。非。死。す。汝。を。亦。
 故。は。彼。人。ハ。難。を。犯。し。危。死。を。忘。る。果。死。逆。旅。は。あ。る。心。苦。
 り。又。藁。二。郎。も。信。あり。義。あり。は。も。あ。る。死。渠。ハ。宴。
 向。上。り。さ。て。こ。が。駒。形。村。は。あり。日。の。り。を。い。へ。如。此。之。終。ハ。箇。
 箇。様。と。標。吉。が。忠。孝。黒。教。が。淫。濫。彼。と。あ。く。此。と。好。く。一。五。十。を。告。
 廣。光。頻。に。驚。嘆。し。わ。れ。標。吉。郎。と。や。ん。も。亦。は。の。義。士。を。
 君。也。く。所。ま。と。祐。あり。御。洞。運。も。ち。た。あ。ん。天。も。明。バ。見。供。し。
 越。中。も。退。く。一。箱。向。判。五。ハ。富。と。い。へ。も。志。者。ハ。客。を。愛。し。
 あり。信。あり。朝。夷。逆。旅。は。あり。と。終。ハ。勇。の。家。は。一。人。究。竟。の。
 隱。宅。岩。神。子。の。中。と。只。管。は。勸。め。義。邦。こ。の。譏。は。後。ひ。て。天。の。明。

待程は雨のやうやく歌なる。かく義邦の炬火を續くをせむく廣光と
 共侶はこの洞の奥をふるよ入ると一反ありぬく奥は廣光ありとの
 中程の石を造れる禿倉ありたり扉は失せく神体もかゝりあま住る
 りのありし吹焼捨る曲突あり床もまべた巨石あり山賊をどの住居
 趾めや又熊を撃搗夫をどの窟獵せし所歎と主程をぬくよ評しつ。
 舊の処よかへりをればらの間より天ハ明く山鳥の声をありはくんと
 主程ハ草鞋の紐結びかえをどほ程は忽地洞の外面は駭し人声
 あり柴は火を被投入れく焼殺せとぞ罵りたる主程はさくち驚死んく
 やよ早足あり吾門の行客之昨夜の雨をあま避く天の明を俟るこ
 殺さるべたりのよあは疎忽の挙動後悔あんと諸声高く呼禁れが
 大将とおぼしきりの洞門は立跨り思あり山賊ハ徑任が逆乱を甘んじく

汝亦迫属この山の神の洞に穴居し昼ハ伏し夜ハ頭れ行客を刺里人を
 劫せり民の訟置くりたるよあつと曩もそれ領主の命を兼り捕捕を
 あると死汝ホもやく逃亡れが且く兵を向られれば後日を送りて再び之を
 来らるを搦り不意は義く推寄りかづいハ領主の御内よるあめり
 ありれら水草十郎昌甫などどくく索を被れを喰りける洞の中を
 主程ハこれぞまきくおあく驚死いつる所さもあらん。あつれとも吾門ハ山賊
 かく穴野伏よあは疑くいづを俟く對面を多くと叫ぶや昌甫竊に
 冷笑ひあつと夥兵を退んとくくゆよと呼れハ廣光ハ先は立義邦ハ
 後ハ跟死洞より進み出る處を左右は待り兵も足を拂く廣光と義邦を
 打倒し矢庭は索を被りたるものと死廣光大怒く蓬死んく此
 挙動も吾門ハ只兩人之何を再三の回答も及ば代理不盡は捕捕や

その賊ありと賊ありと顔色言語よりともあへし疎忽と教國昌甫
 呵くとうち笑ひ志く不敵の癖者ハ形を變名を偽り出段定うあり
 ざらみ賊ありとといへばとて行客ありといへばとて輒く放ち遣べきや汝ホハ
 何國あり何処へ赴く行客あるぞ姓名いりやと問詰られく廣光答ふ
 迷惑し実を告ぐの憚あり沈吟され昌甫ハ眼を瞪らし声をゆり立
 此奴ホその出処をいつて姓名を告ぐらぬハ山賊ハ疑ひか裏面をかほ
 同類あらん搜せしと下知まれ早雄の賊兵十餘人戦を引提半弓は
 矢を刺ひ左右は松明振照らせぞ洞の中は進み入り戦せり敵立奥
 おで隈なく獵求せども二人が外は物もあられが食後退た如義邦を
 ちめめり微運を觀じて頭を低遂に再びめいハも廣光られとく
 主君の心中推量も胸ハ碎けく腸も断離むむり戴せり。

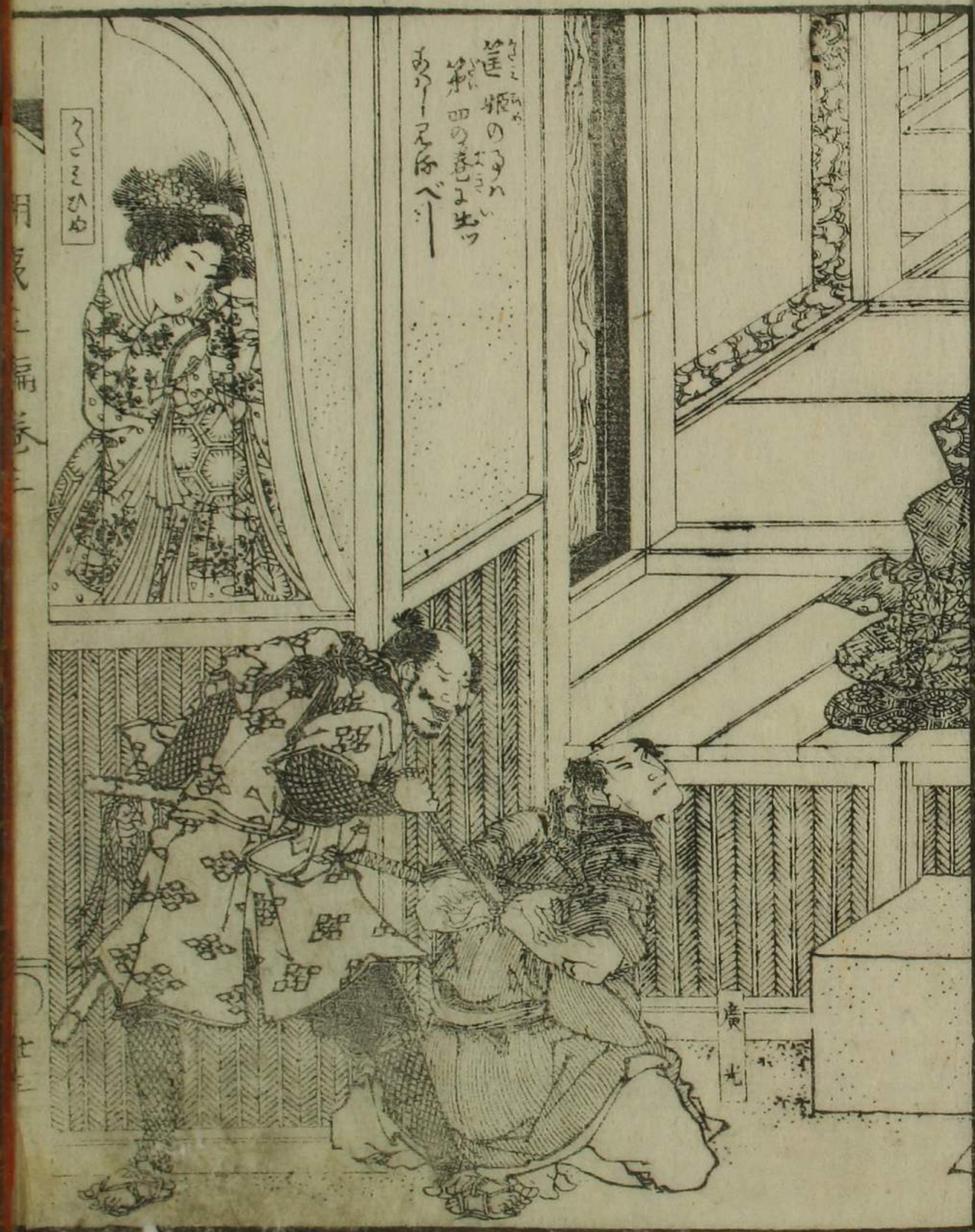
かくて水草昌甫ハ義邦廣光を引立させ趣舎高妙とさくめたり
 高館を望く還りく抑本郡磐井の領主ハ故鎮守府將軍藤原
 秀衡ハ一族あり佐藤莊司元晴之ハ同國信夫郡に在り一ハ
 信夫莊司と唱り便長九郎判官義経の忠臣嗣信忠信が父ありき
 かく秀衡ハ嫡子按察使泰衡その庶兄國衡ホ父の遺訓を悖り
 九郎判官義経を害せんと謀り比元晴ハ泰衡ハ弟泉三郎忠衡と共に
 争ひ謀るも聽れぬ泰衡竟に忠衡を殺し義経を襲て衣河の
 城に自殺させ鎌倉殿は頼朝これとも頼朝これと不義とてみづから泰衡
 國衡を弑伐し合戦終七日の陸奥出羽二國平定實は文治五年
 秋九月あり泰衡その性殘忍あども元晴ハ恩を思ひ義よ伐り
 是は叛る石那坂の砦を守り大軍を防戦せしへとも大夏れ

顛もんともろと死よよく一木の柱べきまわらば元晴弓折き矢種弾く。
 その身へ遂よ生拘らる泰衡國衡滅亡の後頼朝卿をうり元晴を
 赦しくその本國へ還し遣し刺撃井平郡玉造半郡を宛行ハる是
 其の義烈を感してあり元晴則高館の城迹に程近た圓山は屋舗を
 構生残る家諫を招よ討死せしめれ子孫を扶持してその善政を
 施し民は東作を勸むといへども近属大河太郎兼任が子修羅三郎經任
 尉川に起り平泉を略し鄰郡を攻動し乱妨狼藉大りこゝろ後良民
 農業を安くせし離散するもの多りける。あこれども莊司元晴ハ防禦の
 軍配間断なく主後郡民力を勸しよく境を守りしる。經任ハ同近
 平泉ありをがう。磐井五造を犯しゆを竊に隙を窺ひたり。さう程は信夫
 莊司元晴ハいぬらより玉造の山中は草賊隠れ住むとよく豫く計

畧を旋り家諫水草十郎昌甫を大将として兵三十人を指遣し彼
 山賊を搦捕せんとしつれども賊は急ぐを知らず逃失し再びかへらば
 昌甫誤認し義邦廣光を搦捕り信夫の館へ帰陣しつ。駈く件の主後を
 廣庭は引居まば書院のふ土圭驛まき未の刻音はかり且しく佐藤
 信光莊司元晴紋紗の大袖は縞の朽葉色の小袖を被り山施子孫の下襲
 金襴の袴を穿朱鞆の短刀を跨ちかた。鞆の大刀を引提く屏風の背
 あり遠り出端近う布儲るる。綱の上より登る。水草十郎止くと敬して
 索取の夥兵と共に頓首せり。當下吉見主後の頭を奉り元晴をんふ
 年の齡ハ七十有餘あるべし。頭ハ士峯の雪より白く肩ハ揚柳の絮より似
 たり。星眼人を射し威あれども顔色温和ゆる。猛くは長者の風あり
 胡地の人といふをえざり。乃ち在此莊司元晴ハ義邦廣光をうりて

曲録を前より引直し汝亦は是經任る支黨欽又亡命の小賊汝との名を何と
 呼ぶぞいづの比より玉造多洞の中は隱住む疾いへずんと曲録を捨遣
 信と疾視し廣光騷ぐ氣色かく領主の業驗甚錯へり某等ハ山賊
 名ハ二三今一人ハ同郷の伴侶冠太郎と鳴くもの山路迷ひ山路暮て
 雨を彼洞に避るるの洞を多く隱宅と爲るものありいづれと陳れが頭を
 うの掉りのあくそれ偽るらん今汝が語音をばくよ北國のめは似む
 明く地は實を告よ首状せむやいづれと詰問せ一世の浮沈義邦吐嗟と
 跪たん疑ハそのすあり吾們加賀より來つるといへども生國も下總あり
 結城ハ故郷よといひ暗くばらち微笑現さもあらんともあらんとの男子
 伶俐けありこれ汝亦が模様をばくよ一人ハ武士一人ハ商人と見えり

是を伴侶といふと相應くべあれども言語應答山賊は似む又當國の
 人と見え後經任が与黨ありあらんか。さうを經任が同類とせしむる
 諛者の証問あるべしれども亦その中し情由あらんといふやと試問バ
 義邦も廣光も忽ち宵うち騷ださうへを早知りて汝とあつ目と目を
 注し又のありもあうりり元晴ハその氣色をどうんからうち點頭を
 あやと扇をさくたぐ水草昌甫を招たせこれあ青あは渠亦が縛を
 釋放し索取ホを退せよとくといふとせバ昌甫ハあうりぬむとあひ
 かぐも首を傳へくその縛を釋すバ義邦廣光ハ又さうは悪夢の
 覺る心地ハの莊司が胸臆を掃くといふも心ハやせり元晴ハ夥共
 ホが解捨る索を丸く皆退れおとく又昌甫を招たつ扇を口こき
 當く密語ハ昌甫ハるを突耳とさくまきあうり果く縁類を左へ建り



くさくさ

運振のついで
 第四の巻は出
 ありてはべり

廣光



信天司元晴

元晴
 吉見
 主花
 知る

水草十郎

十郎

東云巻

退かたり元晴が相計くぶらう立ち義邦を招のりて賓席をせ
 又廣光を招よせくそいふやう蕙蘭の畏といへどもその香外は洩れ前共
 藏といへともとの氣更も頭其ハ眼翳と耳疎だ稀古の翁よあわれ
 いかほほしく所あり見る所ありと和君主後を知らり包こめぬ
 吉見殿相從へる江三廣光よあうぶゆやといひまき主後驚嘆し
 今の隠もよいかしと多廣光が君の答いゆと咄め義邦臆ひ氣色
 かく現凄し紀眼カ之明察せられ慚愧は堪は只訝し紀信夫ぬし
 某を義邦と知まて縛を放せいと問せもあは疑惑ハ有理元晴邊塞の
 武夫おれども罪あれ人を搦捕る恩賞を求めやあうぶ又いゆその罪
 初めをあらとわぶ一朝のよあは某が来地の平泉の柵は近う敵あり
 間諜を入れらうととやとあふが故も亦密に人をとて片山里あう

穿鑿せし駒形の里人田丸標吉が宿所よと他國の弱冠寓居をこれ
 その模様ハ如此くと告るをまきいゆ比より骨相書をとり索らう吉見
 冠者よよく似たりおほ巨細はあうんは竊は標吉が本貫故郷を問はれ
 あうものわいて告るやう原ハ鎌倉のあうら蒲殿の老臣あり梓治部丞
 有友が家頼馬娘標太とゆれりあの子あう叔母夫田丸郡内は養れ
 ううといへり爰よゆめくその弱冠ハ吉見殿あり分明あれども又情案
 彼人真は徑任が一味と類あうんあ逃る當國へ来りかか平泉の
 柵入らぐ何ぞ標吉が家ハ寓居や加梅修羅五郎間諜者を入る
 とも不知案内の他國人吉邦をとりこれよ充んや彼此をとり案はる
 吉見殿ハ冤枉は身をあうらうの事とそとの事と推知せり
 この故もこれハ只あれども知らぬあうらしてあうのこの會談及ハ在此

近属玉造の云云の洞中は山賊ありとぞまきく腹心の老黨草十郎
 昌甫は兵夥率ひさせ昨夜中より立ちし擗捕らせし且嗣窺ふは
 兩人共の相貌言語山賊に類せぬ折もく彼標吉は養母黒教を忠僧
 塞玄は撃れ當坐の母の仇を殺し今朝もあは訴来ついで退りて
 あつては竊の標吉を閑室に召入れ吉見殿の事を伺ふ渠再三
 陳れれども證據分明なれば脱るも辞なく云云の故をゆく昨夕
 冠者を山越に延しとてかへとやうやく実を吐しつゝ廻標吉は和殿
 ホと透見させ冠者は相違ありやと問ふ是を脱す所なくして落涙
 敷行よ及びしが相従へる一人六某の事ぞ知らばといへ骨相書ぞを
 紫ぶるよこの必廣光あるん冠者を慕ふこの地は来り昨夜より
 山中より再會せし疑ありといひみれば和君達の傳を釋放せむと

肺肝を告るとの冤枉を憐れ元晴元来秀衡が一族めて鎌倉殿の
 譜第より判官殿の恩義ありて子共兩人
 進らせり又蒲殿の義経の舎兄なれば吾等なれば然るも恩も
 かく義もあつたわうのわも彼昌甫が頻りよひあやましく和君主位を
 擗来つちのりく面をこそより更な愛憐の心あり叔姪の骨肉は現有
 ぬく冠者の面影判官殿に似るゆかり元晴子共を先殺して子孫の
 為に謀るは由かりいそこの薄命の公子を舎蔵せんとあつた
 よろかかの如く只あつてもさ館に潜びて時を俟ておれんを保めん
 おのの後盾めあつてとこの赤心を告ぐ義邦のいふもさ廣光の
 雀躍しく天子歡び地を喜び席を避く并謝り送代は月来の
 苦勞を物なり時夏が隱慮諛言又義秀并平標吉が義あり信

ある癖の趣からゆかく告し元晴感嘆羨うた為は親を改めけり。
 且しく元晴の掌を打鳴らせ六豫くありをゆるらん水草十郎昌甫ハ
 田丸標吉をゆる縁頼のほより来つ標吉ハ義邦の恙かたをえて大に
 歡び思ハバ小膝を進り元晴これとえりて標吉郎改當坐中
 養母の讐言塞玄を替りてこの賓客の口状と符合せり。ありてその答に
 びくよ汝のこの賓客は舊縁ありのあまび召く對面を許せその旨を
 ぬよと諭せをゆる義邦ハ坐と立ち廣光も共標吉がほより来つ晴昔
 知れ後のより信夫莊司が蔭に寓る縁由を密語バ標吉も亦黒杖が枉
 死のよりを告より義邦すく嘆息しその仇討の速記を誓く廣光も
 引あはば廣光ハ標吉が月来主君を介抱の歡びを述べよあん標吉も
 亦廣光が主君を慕ふ忠心の空しくを稱く己を彼此會語ゆる

やくも果しく義邦ハ舊の坐よかへり主人は扶掖を元晴ハ莞ゆる
 昌甫を召進つけ汝が鹿息のありよこの人よ徳ありとればあるトの
 翁が代りて當坐の牽出物せんく刀を取て与へく昌甫羞く且
 歡びら全く愆の功名をいへとち戴く腰も帯れば義邦廣光
 共侶も吾們が搦捕られ禍ハ現塞翁が馬なりとち笑く昌甫を
 勞へば昌甫も改めく無二の志を示しり次の日既傾けバ元晴ハ又
 昌甫よりち對ひ標吉ハ夥兵ホも送りせく駒形村へ馳遣し彼
 塞玄が亡骸ハ形の如くよ計を標吉が忠孝いへばさく汝が腹に
 かまはかくハ機密をゆるせもこれこの賓客の一件ハ勞漏さへり
 町寧も説示せバ昌甫ハ謹く肯を標吉ハ傳ふ標吉ハ恩を謝し
 義邦廣光も別を告昌甫が後も跟らるる聽く退却し元晴ハ

席を改く義邦主従に酒食を勸め是より常子剛室は扶持と
 深く溶せ近く使ふ男女中もその心を培ふは食腹心の力に
 ありて絶く他へ漏れどをかくし又元晴ハ標吉が忠孝の大
 功を感賞し渠が養母の忌む果るハ一守りて村長に
 せん他村の民をどうも終りて渠が下よりせんを愛するあり
 深りけり。

吉田慶

吉田慶

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之三終

此女神覽憐子貧ハ
 中斷中上也
 本新

右願出候ニ付奥に枝山也

枯腸流涎喜皇

